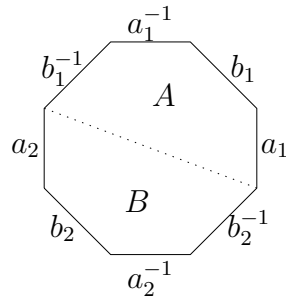


幾何学 II 演習問題解答 No.14 2020年1月22日

問題 68 $4g$ 角形の辺を左回りに $a_1, b_1, a_1^{-1}, b_1^{-1}, \dots, a_g, b_g, a_g^{-1}, b_g^{-1}$ と名前を付け, a_i と a_i^{-1} の組, および b_i と b_i^{-1} の組を同一視すればよい. ただし同一視の際, 向きは反対に貼り付けることとする. 頂点は全て 1 点に同一視されることに注意したい. これが種数 g の曲面を与えていることを見るには, 例えば次のようにすればよい. $g = 1$ のときは明らかである. 種数 $g - 1$ までわかったとして, $4g$ 角形を $a_1, b_1, a_1^{-1}, b_1^{-1}, \dots, a_{g-1}, b_{g-1}, a_{g-1}^{-1}, b_{g-1}^{-1}$ の辺で囲まれる領域 A と残りの辺 $a_g, b_g, a_g^{-1}, b_g^{-1}$ で囲まれる領域 B に分ける ($g = 2$ のときの下図参照).



A を貼り合わせてできる曲面は Σ_{g-1} から円板を取り除いたものと同相であり, B を貼り合わせてできる曲面はトーラス Σ_1 から円板を取り除いたものと同相である. この二つを円板の境界に沿って貼り合わせて得られる曲面は種数 g の曲面となる.

$4g$ 角形の面の内部を 2-cell e^2 , 辺 $a_1, b_1, \dots, a_g, b_g$ の (相対) 内部を 1-cell $e_{a_1}^1, e_{b_1}^1, \dots, e_{a_g}^1, e_{b_g}^1$, 全て一点に同一視される頂点を 0-cell e^0 とすることで, Σ_g に CW 複体の構造が入る. 胞体チェイン複体の境界作用素は

$$\begin{aligned} de^2 &= e_{a_1}^1 + e_{b_1}^1 - e_{a_1}^1 - e_{b_1}^1 + \dots + e_{a_g}^1 + e_{b_g}^1 - e_{a_g}^1 - e_{b_g}^1 = 0 \\ de_{a_i}^1 &= e^0 - e^0 = 0 \\ de_{b_i}^1 &= e^0 - e^0 = 0 \end{aligned}$$

で与えられるため, ホモロジー群は

$$H_k(\Sigma_g) \cong \begin{cases} \mathbb{Z} & k = 0, 2 \\ \mathbb{Z}^g & k = 1 \\ 0 & \text{それ以外} \end{cases}$$

問題 69 次のように CW 複体の構造が入る.

$$\begin{aligned} \text{0-cell} & e^0 = \{(1, 0, 0)\} \\ \text{1-cell} & e^1 = \{(x, y, 0) : x^2 + y^2 = 1\} \setminus \{(1, 0, 0)\} \\ \text{2-cell} & e_1^2 = \{(x, y, z) : x^2 + y^2 + z^2 = 1, z > 0\} \\ & e_2^2 = \{(x, y, 0) : x^2 + y^2 < 1\} \\ & e_3^2 = \{(x, y, z) : x^2 + y^2 + z^2 = 1, z < 0\} \end{aligned}$$

各セルに適当に向きを付けると、境界写像は

$$\begin{aligned} de^1 &= e^0 - e^0 = 0 \\ de_1^2 &= de_2^2 = de_3^2 = e^1 \end{aligned}$$

ゆえ、

$$H_k(X) = \begin{cases} \mathbb{Z} & k = 0 \\ \mathbb{Z}^2 & k = 2 \\ 0 & \text{それ以外} \end{cases}$$

問題 70 $e^i = \{[x_0, \dots, x_i, 0, \dots, 0] : x_i \neq 0\} \subset \mathbb{RP}^n$ とおく. $\mathbb{RP}^n = e^0 \cup e^1 \cup \dots \cup e^n$ であり、特性写像 $\Phi_i: D^i \rightarrow \mathbb{RP}^n$ は

$$\Phi_i(y_1, \dots, y_i) = [y_1, \dots, y_i, \sqrt{1 - |y|^2}, 0, \dots, 0]$$

で与えられる. ただし $|y| = \sqrt{y_1^2 + \dots + y_i^2}$. また接着写像 $\varphi_i: S^{i-1} \rightarrow \mathbb{RP}^{i-1}$ は射影

$$\varphi_i(x_1, \dots, x_i) = [x_1, \dots, x_i]$$

で与えられる. 胞体チェイン複体の境界写像 d は $de^i = k_i e^{i-1}$ の形をしていて、 $k_i \in \mathbb{Z}$ は次の写像 ϕ_i の写像度である.

$$\phi_i: S^{i-1} \xrightarrow{\varphi_i} \mathbb{RP}^{i-1} \rightarrow \mathbb{RP}^{i-1}/\mathbb{RP}^{i-2} \xleftarrow{\cong} D^{i-1}/\partial D^{i-1}$$

この写像 ϕ_i は S^{i-1} 中の「赤道」 $\{(x_1, \dots, x_{i-1}, 0) \in S^{i-1}\}$ を一点につぶし、上半球面 S_+^{i-1} と下半球面 S_-^{i-1} を各々 $D^{i-1}/\partial D^{i-1}$ に次の写像によって移す. (ただし、 $S_{\pm}^{i-1} = \{(x_1, \dots, x_i) \in S^{i-1} : \pm x_i \geq 0\}$ とする.)

$$\begin{aligned} \phi_i^+ : S_+^{i-1} &\rightarrow D^{i-1}, & (x_1, \dots, x_i) &\mapsto (x_1, \dots, x_{i-1}) \\ \phi_i^- : S_-^{i-1} &\rightarrow D^{i-1}, & (x_1, \dots, x_i) &\mapsto (-x_1, \dots, -x_{i-1}) \end{aligned}$$

以上の記述より、 $0 \in D^i$ を原点とすると、 ϕ_i は $\phi_i^{-1}(0) = \{(0, \dots, 0, \pm 1)\}$ の近傍で C^∞ 級であり、 0 は ϕ_i の正則値になっている. ϕ_i^+ は向きを $(-1)^{i-1}$ 倍し、 ϕ_i^- は向きを反対にする写像であることを示そう. S^{i-1} には D^i の境界としての向きが入るが、 \mathbb{R}^i のベクトル場である $\partial/\partial x_i$ は S_+^{i-1} 上では外向き法ベクトル、 S_-^{i-1} 上では内向き法ベクトルである. 従って S_+^{i-1} 上では座標 (x_1, \dots, x_{i-1}) の向きは $(-1)^{i-1}$ の正負と一致し、 S_-^{i-1} 上では座標 (x_1, \dots, x_{i-1}) の向きは $(-1)^i$ の正負と一致する. 以上より ϕ_i^+ は向きを $(-1)^{i-1}$ 倍し、 ϕ_i^- は向きを (-1) 倍する写像であることが分かり、 ϕ_i の次数は $k_i = (-1)^{i-1} - 1$ で与えられる. 以上より胞体チェイン複体は

$$\mathbb{Z} \xleftarrow{0} \mathbb{Z} \xleftarrow{-2} \mathbb{Z} \xleftarrow{0} \mathbb{Z} \xleftarrow{-2} \mathbb{Z} \xleftarrow{\dots} \mathbb{Z} \xleftarrow{0} \mathbb{Z} \xleftarrow{-2} \mathbb{Z} \xleftarrow{\dots} \mathbb{Z}$$

0次 n次

で与えられる. 以上により

$$H_k(\mathbb{RP}^n) \cong \begin{cases} \mathbb{Z} & k = 0 \text{ または } (k = n \text{ かつ } n \text{ は奇数}) \\ \mathbb{Z}/2\mathbb{Z} & 0 < k < n \text{ かつ } n \text{ は奇数} \\ 0 & \text{それ以外} \end{cases}$$

問題 71 $\mathbb{C}\mathbb{P}^n$ の CW 複体の構造を $e^{2i} = \{[x_0, \dots, x_i, 0, \dots, 0] : x_i \neq 0\}$ を $2i$ 次元の開セルとすることで入れる. このとき

$$\begin{aligned}\mathbb{C}\mathbb{P}^n &= e^0 \cup e^2 \cup \dots \cup e^{2k} \cup e^{2k+2} \cup \dots \cup e^{2n} \\ \mathbb{C}\mathbb{P}^k &= e^0 \cup e^2 \cup \dots \cup e^{2k}\end{aligned}$$

であり, 従って

$$\mathbb{C}\mathbb{P}^n / \mathbb{C}\mathbb{P}^k = * \cup e^{2k+2} \cup \dots \cup e^{2n}$$

となる. ここで $*$ は $\mathbb{C}\mathbb{P}^k$ をつぶした 1 点. 従って

$$H_i(\mathbb{C}\mathbb{P}^n, \mathbb{C}\mathbb{P}^k) = \tilde{H}_i(\mathbb{C}\mathbb{P}^n / \mathbb{C}\mathbb{P}^k) \cong \begin{cases} \mathbb{Z} & 2k+2 \leq i \leq 2n, i \text{ は偶数} \\ 0 & \text{それ以外} \end{cases}$$

問題 72 $S^1 = [0, 1]/0 \sim 1$ と考え, 与えられた空間 $X = S^1 \times [0, 1]/(e^{i\theta}, 0) \sim (e^{in\theta}, 1)$ に次のように CW 複体の構造を入れる.

$$\begin{aligned}e^0 &= \{(0, 0)\} \\ e_0^1 &= \{0\} \times (0, 1) \\ e_1^1 &= (0, 1) \times \{1\} \\ e^2 &= (0, 1) \times (0, 1)\end{aligned}$$

e_1^1 は $(i/n, (i+1)/n) \times \{0\}$, $0 \leq i \leq n-1$ と同一視されている. このとき胞体チェイン複体の微分は

$$\begin{aligned}de_0^1 &= de_1^1 = 0 \\ de^2 &= (n-1)e_1^1\end{aligned}$$

で与えられる. したがって

$$H_k(X) \cong \begin{cases} \mathbb{Z} & k=0 \text{ または } (k=2 \text{ かつ } n=1) \\ \mathbb{Z} \oplus \mathbb{Z}/(n-1)\mathbb{Z} & k=1 \\ 0 & \text{それ以外} \end{cases}$$

問題 73 標準的に $D^2 = e^2 \cup e^1 \cup e^0$, $S^1 = e^1 \cup e^0$ と胞体分割する. このとき

$$\begin{aligned}D^2 \times S^1 &= (e^2 \times e^1) \cup (e^2 \times e^0) \cup (e^1 \times e^1) \cup (e^1 \times e^0) \cup (e^0 \times e^1) \cup (e^0 \times e^0) \\ \partial D^2 \times S^1 &= (e^1 \times e^1) \cup (e^1 \times e^0) \cup (e^0 \times e^1) \cup (e^0 \times e^0)\end{aligned}$$

は $D^2 \times S^1$, $\partial D^2 \times S^1$ の胞体分割を与える. 従って

$$D^2 \times S^1 / (\partial D^2) \times S^1 \cong (e^2 \times e^1) \cup (e^2 \times e^0) \cup *$$

胞体チェイン複体の微分は自明であり,

$$H_k(D^2 \times S^1 / \partial D^2 \times S^1) \cong \begin{cases} \mathbb{Z} & k=0, 2, 3 \\ 0 & \text{それ以外} \end{cases}$$

となる.

問題 74 胞体分割を

$$\begin{aligned} e_1^0 &= \{(0, 0)\} \\ e_1^1 &= (0, 1) \times \{0\} \\ e_2^1 &= \{0\} \times (0, 1) \\ e^2 &= (0, 1) \times (0, 1) \end{aligned}$$

とおくとき, 胞体複体の微分は

$$de^2 = 2e_1^1, \quad de_1^1 = de_2^1 = 0$$

で与えられる. したがって

$$H_i(K) \cong \begin{cases} \mathbb{Z} \oplus \mathbb{Z}/2\mathbb{Z} & i = 1 \\ \mathbb{Z} & i = 0 \\ 0 & \text{それ以外} \end{cases}$$

問題 75 ペアリングが well-defined であること. 特異チェイン複体 $S_*(X)$ と特異コチェイン複体 $S^*(X)$ の境界作用素の定義から, $\omega \in S^{*-1}(X)$ と $\sigma \in S_*(X)$ に対して $\omega(\partial\sigma) = (\delta\omega)(\sigma)$ が成り立つ. 従って $\delta\omega = 0, \partial\sigma = 0$ を満たす $\omega \in S^*(X), \sigma \in S_*(X)$ に対して

$$(\omega + \delta\tau)(\sigma + \partial\rho) = (\omega + \delta\tau)(\sigma) + (\delta(\omega + \delta\tau))(\rho) = \omega(\sigma) + \tau(\partial\sigma) = \omega(\sigma)$$

従ってペアリングは well-defined である.

次に連続写像 $f: X \rightarrow Y, [\omega] \in H^*(Y), [\sigma] \in H_*(X)$ に対して,

$$\langle f^*[\omega], [\sigma] \rangle = (f^*\omega)(\sigma) = \omega(f_*\sigma) = \langle [\omega], f_*[\sigma] \rangle$$

以上より示された.

問題 76 de Rham の定理の同型 θ_M は次の二つのチェインホモトピー同値写像によって誘導された.

$$\Omega^*(M) \rightarrow S_{\text{sm}}^*(M) \leftarrow S^*(M)$$

ただし $S_{\text{sm}}^*(M)$ は滑らかな特異チェイン複体 $S_{\text{sm}}^{\text{sm}}(M) \subset S_*(M)$ の双対として定義される. また全て係数は \mathbb{R} とする. 次の図式の可換性を示せばよい.

$$\begin{array}{ccccc} \Omega^k(N) & \longrightarrow & S_{\text{sm}}^k(N) & \longleftarrow & S^k(N) \\ \downarrow f^* & & \downarrow f^* & & \downarrow f^* \\ \Omega^k(M) & \longrightarrow & S_{\text{sm}}^k(M) & \longleftarrow & S^k(M) \end{array}$$

右の四角の可換性は明らかである. 左の四角の可換性を示そう. 水平の写像は ω を $\omega^\sharp: \sigma \mapsto \int_{\Delta^k} \sigma^* \omega$ に写す写像である. 従って滑らかな特異 k 単体 $\sigma: \Delta^k \rightarrow M$ に対して

$$(f^*\omega)^\sharp(\sigma) = \int_{\Delta^k} \sigma^*(f^*\omega) = \int_{\Delta^k} (f \circ \sigma)^* \omega = \omega^\sharp(f_*\sigma)$$

問題 77 同型 $\tilde{H}_*(\bigvee X_\alpha) \cong \bigoplus \tilde{H}_*(X_\alpha)$ は次のように与えられた。

$$\tilde{H}_*(\bigvee X_\alpha) \xleftarrow{\cong} H_*(\bigsqcup X_\alpha, \bigsqcup \{x_\alpha\}) \xleftarrow{\cong} \bigoplus H_*(X_\alpha, \{x_\alpha\}) \xleftarrow{\cong} \bigoplus \tilde{H}_*(X_\alpha)$$

ここで $\pi: \bigsqcup X_\alpha \rightarrow \bigvee X_\alpha$, $j_\alpha: X_\alpha \rightarrow \bigsqcup X_\alpha$ は自然な写像である。包含写像については

$$\begin{array}{ccccccc} \tilde{H}_*(\bigvee X_\alpha) & \xleftarrow{\cong} & H_*(\bigsqcup X_\alpha, \bigsqcup \{x_\alpha\}) & \xleftarrow{\cong} & \bigoplus H_*(X_\alpha, \{x_\alpha\}) & \xleftarrow{\cong} & \bigoplus \tilde{H}_*(X_\alpha) \\ & & \swarrow j_{\alpha*} & & \uparrow & & \downarrow \\ & & & & H_*(X_\alpha, \{x_\alpha\}) & \xleftarrow{\cong} & \tilde{H}_*(X_\alpha) \\ & \searrow i_{\alpha*} & & & & & \end{array}$$

の可換性から従う。射影については

$$\begin{array}{ccccccc} \tilde{H}_*(\bigvee X_\alpha) & \xleftarrow{\cong} & H_*(\bigsqcup X_\alpha, \bigsqcup \{x_\alpha\}) & \xleftarrow{\cong} & \bigoplus H_*(X_\alpha, \{x_\alpha\}) & \xleftarrow{\cong} & \bigoplus \tilde{H}_*(X_\alpha) \\ & & \searrow q_{\alpha*} & & \downarrow & & \downarrow \\ & & & & H_*(X_\alpha, \{x_\alpha\}) & \xleftarrow{\cong} & \tilde{H}_*(X_\alpha) \\ & \searrow p_{\alpha*} & & & & & \end{array}$$

の可換性からわかる。ただし、 $q_\alpha: \bigsqcup X_\alpha \rightarrow X_\alpha$ は X_α 上では恒等写像で、 X_β ($\beta \neq \alpha$) を 1 点 $\{x_\alpha\}$ につぶす写像。

問題 78 もし \mathbb{R}^n と \mathbb{R}^m が同相だとすると、 \mathbb{R}^n から 1 点を除いた位相空間と \mathbb{R}^m から 1 点を除いた位相空間も同相である。 $\mathbb{R}^n \setminus \text{pt}$ は S^{n-1} とホモトピー同値、 $\mathbb{R}^m \setminus \text{pt}$ は S^{m-1} とホモトピー同値である。従って仮定から $H_*(S^{n-1}) \cong H_*(S^{m-1})$ 。球面のホモロジーの計算から $n = m$ が従う。

問題 79 ヒントを用いて、連続なレトラクション $r: D^n \rightarrow S^{n-1}$ が定義される。(ここで $x \in S^{n-1}$ に対して $r(x) = x$ に注意する。) $i: S^{n-1} \rightarrow D^n$ を包含写像とすると、 $r \circ i = 1$ 。したがって簡約ホモロジーに誘導する写像も $r_* \circ i_* = 1$ を満たす。特に i_* は単射である。このことは $\tilde{H}^{n-1}(S^{n-1}) \cong \mathbb{Z}$, $\tilde{H}^{n-1}(D^n) = 0$ と矛盾する。

問題 80 問題 88 と問題 59 より、

$$H_i(A, A \cap B) \cong H_i(A/(A \cap B), *), \quad H_i(A \cup B, B) \cong H_i(A \cup B/B, *)$$

基点付き位相空間として $A/(A \cap B) \cong A \cup B/B$ であることを示せば、結論が従う。 $A \hookrightarrow A \cup B \rightarrow A \cup B/B$ は連続写像であり、 $A \cap B$ を 1 点につぶすので、連続写像 $f: A/(A \cap B) \rightarrow A \cup B/B$ が誘導される。これは全単射であることは明らか。 f が閉写像であることを示せばよい。 $A/(A \cap B)$ の閉集合 F をとる。この A における逆像は A の開集合 \tilde{F} である。 $f(F)$ が閉集合であることを示したい。以下では A, B が閉集合であることを使う。 \tilde{F} が B と交わらないとき、 $f(F)$ の $A \cup B$ における逆像は \tilde{F} であり、開集合である。従って $f(F)$ も閉集合。また、 \tilde{F} が B と交わるとき、 $f(F)$ の $A \cup B$ における逆像は $\tilde{F} \cup B$ でありこれは閉集合。したがって $f(F)$ は閉集合。すなわち f は閉写像で、従って同相写像。

問題 81 相対ホモロジーの長完全列

$$0 = \tilde{H}_n(\Delta^n) \rightarrow H_n(\Delta^n, \partial\Delta^n) \xrightarrow{\partial} \tilde{H}_{n-1}(\partial\Delta^n) \rightarrow \tilde{H}_{n-1}(\Delta^n) = 0$$

より, ∂ は同型写像であったことを思い出しておく. 特にヒントで与えた写像

$$H_n(\Delta^n, \partial\Delta^n) \xrightarrow{\partial} \tilde{H}_{n-1}(\partial\Delta^n) \xleftarrow{\cong} H_{n-1}(\Delta^{n-1}, \partial\Delta^{n-1})$$

は同型である. (2番目の同型は $\partial\Delta^n \cong \Delta^{n-1}/\partial\Delta^{n-1}$ から誘導される. この2番目の同型については, 以下の証明では少し違った形で述べる.)

恒等写像 $1_n: \Delta^n \rightarrow \Delta^n$ が $(\Delta^n, \partial\Delta^n)$ の相対サイクルになることは明らかである. これが $H_n(\Delta^n, \partial\Delta^n)$ の生成元であることを n についての帰納法で示す.

$n = 1$ のとき, $H_1(\Delta^1, \partial\Delta^1) \xrightarrow{\partial} \tilde{H}_0(\partial\Delta^1)$ の下で, 恒等写像 $1_1: \Delta^1 \rightarrow \Delta^1$ は $[P_1] - [P_0]$ に移る. ただし, $P_0 = (1, 0), P_1 = (0, 1)$ であり $[P_i]$ は P_i への定値写像の与える 0 単体とする. $[P_1] - [P_0]$ は明らかに $\tilde{H}_0(\partial\Delta^1) = \tilde{H}_0(\{P_0, P_1\})$ の生成元であるから 1 は生成元をなす.

$n-1$ までわかっていたとして, n のとき. 定義から $\partial 1_n = \sum_{i=0}^n (-1)^i \partial_i$ である. ただし, $\partial_i: \Delta^{n-1} \rightarrow \Delta^n$ は第 i 面を与える写像 $\partial_i(t_0, \dots, t_{n-1}) = (t_0, \dots, t_{i-1}, 0, t_i, \dots, t_n)$. $\partial\Delta^n$ の第 0 面以外の和集合を $C = \Delta_1^{n-1} \cup \dots \cup \Delta_n^{n-1}$ とする. ただし $\Delta_i^{n-1} = \text{Im}(\partial_i)$. C は可縮であって,

$$\partial\Delta^n/C \cong \Delta_0^{n-1}/\partial\Delta_0^{n-1} = \Delta^{n-1}/\partial\Delta^{n-1}$$

相対ホモロジー完全列より,

$$0 = \tilde{H}_{n-1}(C) \rightarrow \tilde{H}_{n-1}(\partial\Delta^n) \xrightarrow{\cong} H_{n-1}(\partial\Delta^n, C) \rightarrow \tilde{H}_{n-2}(C) = 0$$

であり, さらに上の同相写像から

$$H_{n-1}(\partial\Delta^n, C) \cong \tilde{H}_{n-1}(\partial\Delta^n/C) \cong \tilde{H}_{n-1}(\Delta^{n-1}/\partial\Delta^{n-1}) \cong H_{n-1}(\Delta^{n-1}, \partial\Delta^{n-1})$$

以上の同型の下で, $\partial 1_n$ がどう移されるかを見る. $\partial_1, \dots, \partial_n$ は C に含まれているので, $\partial 1_n = \sum_{i=0}^n (-1)^i \partial_i \in \tilde{H}_{n-1}(\partial\Delta^n)$ は $\partial_0 \in H_{n-1}(\partial\Delta^n, C)$ に対応する. またこれは $1_{n-1} \in H_{n-1}(\Delta^{n-1}, \partial\Delta^{n-1})$ に対応している. 帰納法の仮定より 1_{n-1} は生成元であったから, 1_n も生成元となる.

問題 82 (1) $\omega \in \Omega_c^k(M \setminus \partial M)$ と滑らかな特異単体 $\sigma: \Delta^k \rightarrow M$ をとる. もし σ の像が ∂M に含まれていれば $\int_{\Delta^k} \sigma^* \omega = 0$ である. 従ってペアリング $\Omega_c^k(M \setminus M) \times S_k^{\text{sm}}(M, \partial M) \rightarrow \mathbb{R}$ は well-defined. また Stokes の定理より (Δ^k の境界に誘導される向きについては No.1 の問題 3 の解答参照), $\tau \in \Omega_c^{k-1}(M \setminus \partial M)$ に対して

$$\begin{aligned} \langle d\tau, \sigma \rangle &= \int_{\Delta^k} \sigma^* d\tau = \int_{\Delta^k} d(\sigma^* \tau) \\ &= \sum_{i=0}^k (-1)^i \int_{\Delta^{k-1}} \partial_i^* \sigma^* \tau \quad (\text{Stokes の定理}) \\ &= \sum_{i=0}^k (-1)^i \int_{\Delta^{k-1}} (\sigma \circ \partial_i)^* \tau = \langle \tau, \partial\sigma \rangle \end{aligned}$$

ここで $\partial_i: \Delta^{k-1} \rightarrow \Delta^k$, $(t_0, \dots, t_{k-1}) \mapsto (t_0, \dots, t_{i-1}, 0, t_i, \dots, t_{k-1})$ は第 i 面を与える写像.

(2) 図式に現れるベクトル空間 $H_n(D^n, \partial D^n; \mathbb{R})$, $H_{n-1}(\partial D^n; \mathbb{R})$, $H_{\text{dR},c}^n(D^n \setminus \partial D^n)^*$, $H_{\text{dR}}^{n-1}(\partial D^n)$ は全て 1 次元であるから, DR_1 , DR_2 の下で生成元が対応することを示せばよい. $H_n(D^n, \partial D^n; \mathbb{Z}) \cong \mathbb{Z}$ の生成元は問題 81 より同相写像

$$\sigma: (\Delta^n, \partial \Delta^n) \cong (D^n, \partial D^n)$$

によって与えられる. σ を少し動かして, σ とホモトピックな C^∞ 級写像 $\tilde{\sigma}$

$$\sigma \simeq \tilde{\sigma}: (\Delta^n, \partial \Delta^n) \rightarrow (D^n, \partial D^n)$$

をとる. $[\sigma] = [\sigma_*(1_n)] = [\tilde{\sigma}_*(1_n)] = [\tilde{\sigma}]$ より $[\tilde{\sigma}]$ は $H_n(D^n, \partial D^n; \mathbb{Z})$ の生成元である. 十分小さい開球体 $U \subset D^n$ に対して, $\tilde{\sigma}|_{\tilde{\sigma}^{-1}(U)}: \tilde{\sigma}^{-1}(U) \rightarrow U$ は向きを保つ微分同相と仮定できる. $H_{\text{dR},c}^n(D^n \setminus \partial D^n)$ の生成元 $[\omega]$ で $\text{Supp } \omega \subset U$ なるものをとる. このとき $\int_{D^n} \omega \neq 0$ である. このとき

$$\text{DR}_1([\tilde{\sigma}])(\omega) = \int_{\Delta^n} \tilde{\sigma}^* \omega = \int_{\tilde{\sigma}^{-1}(U)} \tilde{\sigma}^* \omega = \int_U \omega = \int_{D^n} \omega.$$

従って $\text{DR}_1([\tilde{\sigma}]) = \int_{D^n}$.

また第 i 面の写像 $\partial_i: \Delta^{n-1} \rightarrow \Delta^n$ に対して, $\partial_i \tilde{\sigma} := \tilde{\sigma} \circ \partial_i: \Delta^{n-1} \rightarrow \partial D^n$ を考える. ∂D^n のある (非空な) 開集合 $V \subset \text{Im}(\partial_0 \tilde{\sigma})$ が存在して V は $\text{Im}(\partial_i \tilde{\sigma})$, $1 \leq i \leq n$ と交わらず, $\partial_0 \tilde{\sigma}|_{(\partial_0 \tilde{\sigma})^{-1}(V)}: (\partial_0 \tilde{\sigma})^{-1}(V) \rightarrow V$ は微分同相, さらに $\tilde{\sigma}^{-1}(V) \subset \Delta^n$ のある近傍で $\tilde{\sigma}$ は境界付き多様体の微分同相を与えると仮定できる. 第 0 面に誘導される向きの計算 (No.1 の問題 3) から, $\partial_0 \tilde{\sigma}|_{(\partial_0 \tilde{\sigma})^{-1}(V)}$ は向きを保つ. $H_{\text{dR}}^{n-1}(\partial D^n)$ の生成元 $[\tau]$ で $\text{Supp } \tau \subset V$ となるものをとる. このとき,

$$\text{DR}_2([\partial \tilde{\sigma}])(\tau) = \sum_{i=0}^n (-1)^i \int_{\Delta^{n-1}} (\partial_i \tilde{\sigma})^* \tau = \int_{(\partial_0 \tilde{\sigma})^{-1}(V)} (\partial_0 \tilde{\sigma})^* \tau = \int_V \tau = \int_{\partial D^n} \tau.$$

従って $\text{DR}_2([\partial \tilde{\sigma}]) = \int_{\partial D^n}$. 以上より主張が示された.

問題 83 \mathbb{R}^n が可縮であることと, 相対ホモロジー完全列より

$$0 = \tilde{H}_n(\mathbb{R}^n) \rightarrow H_n(\mathbb{R}^n, \mathbb{R}^n \setminus \{0\}) \xrightarrow{\cong} \tilde{H}_{n-1}(\mathbb{R}^n \setminus \{0\}) \rightarrow \tilde{H}_{n-1}(\mathbb{R}^n) = 0$$

であり, また S^{n-1} は $\mathbb{R}^n \setminus \{0\}$ の変位レトラクトであるから,

$$\tilde{H}_{n-1}(\mathbb{R}^n \setminus \{0\}) \cong \tilde{H}_{n-1}(S^{n-1}) \cong \mathbb{Z}.$$

以上より $H_n(\mathbb{R}^n, \mathbb{R}^n \setminus \{0\}) \cong \mathbb{Z}$.

M を多様体, $x \in M$ とする. x の開近傍 U で \mathbb{R}^n と同相なものがとれる. 切除定理から

$$H_n(M, M \setminus \{x\}) \cong H_n(U, U \setminus \{x\}) \cong H_n(\mathbb{R}^n, \mathbb{R}^n \setminus \{0\}) \cong \mathbb{Z}$$

点 x での M の向きは U の向きを定めることに注意する. x 中心の U に含まれる閉球体 D^n をとるとき, $H_n(M, M \setminus \{x\}) \cong H_n(U, U \setminus \{x\}) \cong H_n(D^n, \partial D^n)$ である. (2 番目の同型は, 例えば相対ホモロジー長完全列から分かる.) 問題 82 より $H_n(D^n, \partial D^n)$ の生成元の取り方は D^n の向きの取り方と対応している. 以上より $H_n(M, M \setminus \{x\})$ の生成元の取り方は点 x での向きの取り方と対応する.

問題 84 $x \in M$ と (x の座標近傍に含まれる) x 中心の閉球体 D^n をとる. このとき

$$H_n(M) \xrightarrow{\cong} H_n(M, M \setminus \text{Int}(D^n)) \xleftarrow{\cong} H_n(D^n, \partial D^n)$$

は全て同型である. 実際, 以下の可換図式

$$\begin{array}{ccccc} H_n(M) & \longrightarrow & H_n(M, M \setminus \text{Int}(D^n)) & \longleftarrow & H_n(D^n, \partial D^n) \\ & \searrow i_x & \downarrow \cong & & \downarrow \cong \\ & & H_n(M, M \setminus \{x\}) & \xrightarrow[\text{excision}]{\cong} & H_n(D^n, D^n \setminus \{x\}) \end{array}$$

において i_x が同型である事実から従う. (縦の写像の同型性は相対ホモロジー長完全列から分かる.) de Rham の定理の与える写像 $\text{DR}_1, \text{DR}_2, \text{DR}_3$ は次の可換図式を満たす.

$$\begin{array}{ccccc} H_n(M; \mathbb{R}) & \xrightarrow{\cong} & H_n(M, M \setminus \text{Int}(D^n); \mathbb{R}) & \xleftarrow{\cong} & H_n(D^n, \partial D^n; \mathbb{R}) \\ \text{DR}_1 \downarrow \cong & & \downarrow \text{DR}_2 & & \downarrow \text{DR}_3 \\ H_{\text{dR}}^n(M)^* & \xrightarrow{i_* \text{ の 双対}} & H_{\text{dR},c}^n(\text{Int}(D^n))^* & \xlongequal{\quad} & H_{\text{dR},c}^n(\text{Int}(D^n))^* \end{array} \quad (1)$$

ここで $i: \text{Int}(D^n) \rightarrow M$ は包含写像で, $i_*: H_{\text{dR},c}^n(\text{Int}(D^n)) \rightarrow H_{\text{dR}}^n(M)$ を導くものである. 実際, チェインレベルの写像も同じ記号 DR_i で表せば, 滑らかな特異 n 単体 $\sigma \in S_n^{\text{sm}}(M)$ と $\omega \in \Omega_c^n(\text{Int}(D^n))$ に対して,

$$\text{DR}_1(\sigma)(i_*\omega) = \int_{\Delta^n} \sigma^*(i_*\omega) = \text{DR}_2(\sigma)(\omega)$$

また同じく $\sigma \in S_n^{\text{sm}}(D^n)$ に対して

$$\text{DR}_2(\sigma)(\omega) = \int_{\Delta^n} \sigma^*\omega = \text{DR}_3(\sigma)(\omega)$$

が成立する.

基本類 $[M] \in H_n(M)$ の誘導する $H_n(M, M \setminus \{x\}) \cong H_n(D^n, \partial D^n)$ の生成元を $[\sigma]$ とする. 必要なら $[M]$ を $-[M]$ で置き換えて, $[\sigma]$ が (問題 82 の意味で) D^n の標準的な向きに対応すると仮定してよい. すなわち,

$$\text{DR}_3([\sigma]) = \int_{D^n}$$

また, M の向きを D^n 上で D^n の標準的な向きと一致するように選ぶとき, 可換図式 (1) の下の行の対応で $\int_M \in H_{\text{dR}}^n(M)^*$ が $\int_{D^n} \in H_{\text{dR},c}^n(D^n)^*$ に対応する. 実際,

$$\int_M i_*\omega = \int_{D^n} \omega, \quad \omega \in \Omega_c^n(\text{Int}(D^n))$$

可換図式をたどって, $\text{DR}_1([M]) = \int_M$ が従う.

問題 85 Hatcher, *Algebraic Topology*, Proposition A.3 参照.

問題 86 Hatcher, *Algebraic Topology*, Proposition A.1 参照.

問題 87 (\Rightarrow) は明らか. (\Leftarrow) を示す. X の位相の定義から, $F \cap X^n$ が全ての n について閉集合であることを示せばよい. $F \cap X^0$ が閉であることは X^0 は離散集合であることから明らか. 帰納的に $F \cap X^{n-1}$ が閉であることが分かったとする. $F \cap X^n$ が閉であることを示すには, 商位相の定義から, 任意の特性写像 $\Phi_\alpha: D_\alpha^n \rightarrow X^n$ に対して $\Phi_\alpha^{-1}(F)$ が閉であることを示せばよい. $\Phi_\alpha(D_\alpha^n) \subset \overline{e_\alpha^n}$ ゆえ (実際は $\Phi_\alpha(D_\alpha^n) = \overline{e_\alpha^n}$) $\Phi_\alpha^{-1}(F) = \Phi_\alpha^{-1}(F \cap \overline{e_\alpha^n})$. 仮定から $F \cap \overline{e_\alpha^n}$ は閉集合ゆえ $\Phi_\alpha^{-1}(F)$ は閉集合.

問題 88 Hatcher, *Algebraic Topology*, Proposition A.5 参照.

問題 89 Hatcher, *Algebraic Topology*, Section 3.B 参照. (セルの数が) 可算ではない CW 複体の積については, その積位相に関して, 問題に与えたような CW 構造を持つとは限らない. 同書 Theorem A.6 とそのあとの例を参照.

問題 90 胞体チェイン複体の境界作用素の授業で与えた記述と, No.1 問題 3 の向きの計算から明らかである.